



Title	懷徳堂に学ぶ
Author(s)	山田, 稔
Citation	懷徳. 1985, 54, p. 2-4
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90639
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

懷徳堂に学ぶ

懷徳堂・友の会副会長

山 田 稔

(ダイキン工業㈱社長)



私は、懷徳堂・友の会の発足にあたり、弘世現会長のお誘いをいただき、財界の一員として会の維持発展にいささかなりともお手伝いできればと、懷徳堂については全くの門外漢ながら副会長という重責をお受けした次第です。したがって今回このような専門的な場で発言の機会を与えられ、非常に光榮に感ずるとともに、恐縮に存じます。

一昨年の大阪築城四百年祭、御堂筋バレードにはじまるビッグイベントでスタートした大阪21世紀計画は、新しい街づくりの面でも、大阪城ホールの竣工、南港見本市会場のオープン、また大阪城に隣接するOBP（大阪ビジネスパーク）では、ツイン21ビルを皮切りに、次々に新ビル建設の力強い槌音が響き、いま大阪は新しい街づくりをめざして着実に動きだしたといえます。

これからの大阪の街づくりについて、私の最大の関心事は、中之島の跡地利用の問題と、御堂筋の再開発です。

先年、私は街づくりのあり方を学ぶべく、大阪大学の上田篤教授ともども、ヨーロッパの都市めぐりをする機会を得ました。このとき痛切に感じたことは、街には核がある、都市には文化がある、と

いうことでした。

その眼でいまの大阪を観ますと、これまで大阪は商都であり、文化は京都・奈良にまかせればよいという感覚が一般的であり、戦災で古いものが焼失してしまったこともあって、残念ながら文化の香りの乏しい都市になってしまっていると思います。

ところが、この懷徳堂に関わるようになって驚かされたことは、かつての懷徳堂の地にその碑が残っているにすぎないと思っていたのが、うかがえばその遺品がずいぶん残されており、いまでも発見が続いていることです。さらにご専門の先生方のお話では、これは単に懷徳堂についてのことだけではなく、すでに修復された適塾についても、また近松・西鶴等についても、同じようなことがいえるということです。

こうした大阪の伝統文化を専門に研究されている先生方と接する機会を得て強く感じましたのは、先生方はこのような大阪の先人達の遺業を何とか世に出し、市民に大阪文化の香りを身近に感じてもらえる場を持ちたいという、強い熱意をもって研究を続けておられることです。

まだこれらの先生方の希求は個々の段階にとどまり、大阪の伝統文化を結集してというところまでは至っていないようです。しかし、私はこのような話をお聞きして、もしこれらをひとつに結集することができれば、大きな力になると思ったことです。

かつて商都大阪といわれるこの地にも、文化が花開き商業とともに栄えた事実もあるのです。

また、過去大阪の街づくりに、先輩たちは御堂筋・地下鉄とともに大阪のシンボルとして大阪城を復元し、市民に心の支えを与えてくれました。

大阪の新しい街づくりが動きだしたいま、これら大阪の伝統文化の遺産を何らかの形で顕彰するこ

とが必要だと思ひます。たとえば、中之島に大阪伝統文化の殿堂と仮に名づけたものができればどうでしょう。学究の徒も一般市民も気軽にに行ける場所に、懷徳堂も適塾も、そして近松も西鶴も……。そこから東西につながる中之島グリーンベルトの散策の道に文化施設を経めぐるコースも加わり、市民にとっても海外からの人々にも親しまれるものができないだろうか、そして南北に走る御堂筋の歩道を広げ、各ビルの一階が商店化し、月曜日でも夜でも人々がそぞろ歩きする街づくりができないだろうか、こんな街になれば大阪はもっと活性化するだろうといった夢も生れてきます。

いささか夢物語にはしてしまいましたが、私は懷徳堂・友の会を通じて接することのできた、大阪大学文学部の諸先生からお教えいただき、いささかなりとも大阪伝統文化の一端にふれることができました。今、この懷徳堂記念会、友の会をますます充実し、さらに市民に身近なものに近づけていく必要性を痛感しております。この点私も及ばずながら尽力する所存ですが、友の会々員のみなさまにも併せてご協力のほどお願い申し上げます。